

海に眠る桜

作  
び  
い  
こ

登場人物

私（佐伯）

青年

看護師（女学生）

アンサンブルキャスト男女4名（兵士・子ども・現代人など）

\*看護師と女学生は同一人物が演じる

舞台には二人の青年。  
歳は18歳。

時代は太平洋戦争末期の日本。

青年 「人の人生はどうでもいい。要は、自分がどう生きたいかだ。」

私 「ほう。だから？」

青年 「だからお前は、俺が今日死のうが明日死のうが変な気を持つ必要はないんだ。俺は行きたいからあそこへ行く。それだけだ。」

青年 「お前にはお前の、俺には俺の役割がある。俺の役割は、ここで体当たりして、勝因を作ることだ。」

私 「役割か。」

青年 「無駄死にはしないさ。」

私 「分かった。達者でな。」

飛行機の音がする。

零戦の音が徐々に弱まり、時代は現代に切り替わる。

一人の老人が桜の木の下で酒を飲んでいる。

やがて、歳をとっていないあの時の青年が姿を現わす。

私 「おお、やっと来たか。」

青年 「待たせた。」

私 「お前はいつでも時間に遅れてくる。」

青年 「すまない。」

私 「はは、冗談だ。時間なんてたっぷりとある。いつでも待っておるよ。」

青年 「そうだな。俺にも一杯くれ。」

私 「ああ、ほら。」

私、青年に酒を注ぐ

青年 「綺麗な桜だ。」

私 「ああ。そうだな。」

青年 「俺は…桜になれたかな。」

私 「もちろんだとも。」

青年 「日本は、変わったか。」

私 「ああ、変わった。」

青年 「豊かで、いい国になったか。」

私 「…心配するな。」

青年 「ありがとう。」

私 「ありがとうだつて？」

青年 「お前がこうやって生きていてくれて、私は嬉しい。」

私 「そうか。」

零戦の音がする

いつの間にか青年はいなくなっている

青年（声） 「行く時は、高度を下げて飛ぶからな。それが別れの挨拶だと思え。」

零戦の音にかき消されんばかりの青年の声

看護師の音がする。

看護師 「佐伯さん。」

場面は現在の病棟へ移る

私が長期間入院している病院

看護師 「はい、佐伯さん。ちょっとだけ枕の位置変えますね。」

私 「はい、どうも。」

看護師 「あら、汗かいてますね。暑いですか。」

私 「いやあ、大丈夫ですよ。」

看護師 「ちよつとお熱測っておきましょうね。」

私 「ああ、はい。どうも。」

看護師 「はい。ちよつと冷やっとなりますよ。」

看護師が私の脇に体温計を挟む。

私 「ああ、情けない。」

看護師 「何か言われましたか？」

私 「いや。」

看護師 「はい。」

さつさと熱を測り、記録をつけ、去っていく看護師。

私 「やれやれ。」

私 「変わったよ。日本は。私の手も、足も、もう随分と前から動きやしない。けどすごい。管に繋がれて、私はまだ今日も生きている。」

私 「桜か…。私は今日も思い出す。あの日のことを。あの、爆弾をのせた飛行機と一緒に、お前が飛んで行ったあの日のことを。空は、晴れていた。け  
たたましい音がして、地震が起きたのかというほどに部屋が揺れた。あれは、お前の別れの挨拶だったね。」

場面は青年の特攻前夜へ遡る

何人かの特攻兵たちが会話をしている

場所は三角兵舎

敵軍から見つからないよう、突撃前の兵士が寝泊まりする兵舎の半分は土に埋まっている

兵士 1 「いよいよだな。」

青年 「ああ、いよいよ明日だ。」

兵士 2 「天候もよさそうだ。」

兵士 3 「そうだな。」

青年 「ああ。」

兵士 2 「うまくやれよ。」

青年 「分かってる。」

兵士 3 「ああしかし。」

兵士 1 「どうした。」

兵士 3 「いや…いつも通り明日は来るんだが。」

青年 「ほう。」

兵士 3 「…いや、その」

青年 「なんだ、はっきりとものを言え！」

兵士 3 「だから、その、明日は来るんだが、明後日ってやつは、その、俺たちには来ないんだよな。」

青年 「何を今更！」

兵士 3 「そうなんだけどな、明日のは訓練じゃないんだな。本当に体当たり…」

青年 「それ以上言うんじゃない！」

兵士 2 「おい、落ち着け。」

兵士 1 「そうだ、こうやって話すのも今日が最後なんだから。」

青年 「少し、一人になりたい。」

兵士 3 「すまなかった。」

青年 「いや、こちらも悪かった。」

兵士 1, 2, 3 外へ出ていき、青年は一人

紙を取り出す青年  
何かを書いている

遺書のようなものである。

青年 「行かなくては。早く。早くいかなくては。」

青年 「分かっている。私だって馬鹿ではない。これで戦局が変わるかどうかなんて運試しのようなものだ。」

青年 「分かっている。ああだけど、早く、早く行かなくては。沖繩が落ちてしまう。今、私がいかななくては。こうやっている時間さえ惜しい。ここで行かねば、日本は負ける。」

青年 「しかし…役割はこんなに明確なものなのに、別れはこんなに悲しいものか。」

青年 「今まで、ありがとうございます。」

青年、兵舎の中で涙をこらえている。

勢いよく布団に潜り込む青年。頭まで布団をかぶる。聞こえるのは押し殺して泣く青年の息遣いのみ。

私の声がする

私 「残された身にもなれよ…敗戦が決まったらお前の心意気を、知ろうとする奴なんか誰もいない…」

青年 「すまない。」

私 「さみしいじゃないか。」

青年 「私だって、さみしいさ。」

私 「…そちらではもう桜が咲いているときぐ。」

青年 「ああ、ここは暖かい。」

私 「…行くのか。」

青年 「ああ。」

私 「どうしても。」

青年 「ああ。」

私 「引き返せないようになっていただけじゃないのか。」

青年 「違う。」

私 「…そうか。」

青年 「信じてくれ。」

私 「…。」

青年 「信じてくくれ！」

私 「ああ、分かった。」

私の声は遠ざかる

青年は再び布団をかぶる。もしくは大きく布団を殴るなど、暴力的な行為にでてよい。いずれにせよ、青年が自らの邪念を払っているように観客には見える

青年 「ああ！もう！何故引き留めるのか！」

青年 「…大丈夫だ。もう何も出てこない。」

青年の目には決意

なでしこ隊の女学生が一人

女学生 「お気をつけて。」

青年 「いってきます。」



女学生、小銭に差し出して

女学生 「夕べ頼まれたお手紙を出してきました。これはそのお釣りです。」

青年 「ああ。ありがとう。」

青年はお釣りを受け取らずに、自分の財布を取り出す

青年 「もう、僕には必要のないものだから。これも、一緒に持つておいてください。」

女学生 「はい。」

なでしこ隊は決して泣いてはならない。

必死で涙をこらえて言葉を絞り出す。

女学生 「ありがとうございます。」

青年 「こちらこそ、ありがとう。」

大きな零戦の音に当たりは包まれる。

見えるのは青年のシルエットのみ

青年は、たばこを取り出し、ゆっくりとふかす

恩賜のたばこである

けむりの中、青年の姿は見えなくなっていく、私の声が聞こえる

私 「何も言わないで行きやがって！死人に口なしとはよく言ったもんだ。お前が語らないと、みんな忘れてしまう。お前が語らないと。口を開くには、

私には荷が重すぎる。なにより、お前の最後の言葉が私にはまだ聞こえてこない。」

青年（声） 「信じてくれ。」

私 「いったい何を思っていた。」

青年（声） 「信じてくれ。」

私 「本気で勝てると思っていたのか。」

青年（声） 「信じてくれ」

私 「その命が、惜しくなかったのか。」

青年（声） 「信じてくれ。」

数人の男女が登場する。

雑踏を表す。その中に私もいる。

私だけが止まっているイメージ。

男か女 「1945年、終戦。日本は、負けた。」

私 「日本は中も外も、大きく変わった。」

男か女 「ついて行け、変化に。」

男か女 「ついて行け、変化に。」

男 「ジープだ」

逃げる人々

転がってくるタイヤがアメリカ兵のジープを表している

投げ落とされた大きな片方の靴が、アメリカ兵の身体の大きさを表している

後ろを向いて手を背中に回し、もじもじしている子どもたち。

先ほどのアンサンブルが演じても良いだろう。

一人が思い切って手を背中から体の前へ差し出すと、次々に他の子どもも手を前へ一斉に振り替える子どもたち

手にはキャンディやチョコレート

子ども1 「大きかったなあ。」

子ども2 「おっかなかったなあ。」

子ども3 「靴はこれくらいあった。」

子ども2 「いいや、これくらい。」

子ども1 「背はこれくらいあった。」

子ども2 「いいや、もっと大きかった。」

子ども1 「これ、食べても大丈夫かな。」

子ども3 「食べよう。」

時代は戦後から経済成長期

日本は大きな時代の曲がり角をむかえている

大きな音楽

その中で聞こえる私の声。時に私以外の声が混ざってもよい。

そして、時代の流れを表しながら踊るダンサーたち

「1946年、新憲法施行。」

「1950年、朝鮮戦争開戦。朝鮮特需。」

「1964年東京オリンピック。」

「1965年から1970年、いびなぎ景気。」

「1973年、石油危機。日本の経済成長、終了。」

「1986年、バブル景気。」

「1991年、バブル崩壊。…平成不況。」

「ついて行け、変化に。」

「ついて行け、変化に。」

私は一人

溜息を一つ

大きく息をして

私 「どんな気持ちで体当たりしたんだ。何を思って、何を考えていたんだ。」

青年がやってくる

青年 「すまない、待たせた。」

私 「お前はいつでも、遅れてくる。」

青年 「すまないな。」

私 「いや。構わないさ。」

序盤と同じように、青年に酒を渡す私。

二人で酒を飲む。

青年 「元気そうだな。」

私 「はは。毎日忙しいよ。もう歳だっというのに。」

青年 「モノが増えたな。」

私 「ヒトも増えた。」

青年 「桜は咲いているか。」

私 「ああ、今年も満開だ。」

青年 「日本人は桜が好きだからな。」

私 「ああ、しかし今夜から雨が降るらしい。週末まではもたないだろう。」

青年 「いずれ散る命さ。」

私 「…そう言うなよ。」

青年 「だけど、綺麗だ。」

私 「ああ、綺麗だ。」

風の音

散る桜

青年 「ほらみる、散り方だって潔い。」

青年はそういうと、酒を飲みほし、消えていく

まるで、最後の杯のように

私 「なあ、お前の言っていた豊かな国に、今の日本はなっているかい。」

青年の姿はもうない

私 「…肝心な時に、いつもお前はいなくなる。」

私 「…死人に口なし。か。」

私 「私は今でもお前の答えを聞けないでいるよ。あの時、お前は何を思っていた。何を信じていた。そして、その願いはかなったのか。お前やお前と同じときに散っていった命たちは、今や“特攻隊”として日本の過去の一部になっている。…もう過去のことなのか。思い出せば、いけないのか。前に進まなければいけないのかい。止まっているのは私だけなのかい。ああ、私は歴史のはざまの大きな渦の中に取り残されている気がしてならないのさ。だって…。」

私 「だって、誰がお前の気持ちを理解するんだ。誰が、散っていった命のことを理解するんだ。」

いつの間にか、雑踏の中に私はいる

音楽があってもよい

生徒たちが学校の授業を受けている感じでも良いだろう  
インターネットを使って調べている形にしても良い

男か女 「特攻隊。」

男か女 「特別攻撃隊。」

男か女 「生還の見込みが通常よりも低い決死の攻撃。」

男か女 「もしくは戦死を前提とする必死の攻撃を行う戦術部隊のこと。」

男か女 「以上ウィキペディアより。」

私 「大東亜戦争末期、1945年5月7日、同盟国であったドイツが降伏する。連合国は一気に日本を攻めた。」

男か女 「一気に攻めた。」

私 「この時、日本本土の最前線は沖縄と考えられていた。」

男か女 「最前線は沖縄。」

私 「沖縄が落ちたら日本は終わる。」

男か女 「日本は終わる。」

私 「この最前線である沖縄を守るためにとられた方法、それが」

男か女 「特攻作戦。」

私 「圧倒的な戦闘力をもつアメリカ、それに対抗しようとしたのが日本の精神力。」

男か女 「精神力。」

私 「精神力を武器としたこの作戦。」

男か女 「天皇陛下ばんざーい。」

男か女 「国家総動員」

男か女 「ススメススメヘイタイスメ」

男か女 「国民皆兵」

男か女 「…つかこれ、完全に洗脳だよね。」

男か女 「かわいそう」

男か女 「だってさ、ほら、もうすぐ戦争終わるのに。」

男か女 「怖いなあ。」

男か女 「平和な時代に生まれて本当に良かったー。」

私 「…だれが理解するんだ。」

場面はやがて、現代の病室へ変化する

私 「ここには誰も訪ねてこない。」

看護師 「え、佐伯さん、何か言いました？」

私 「いや、何も。」

看護師 「いいお天気ですね。」

私 「ほう、空を見る余裕がありますか。」

看護師 「どういう意味です。」

私 「いや、いつもお忙しそうにされているから。私は毎日こうやって空を眺めることが仕事のようなものだけだ。」

看護師 「好きなんです。空。」

私 「ほう。」

看護師 「あ、飛行機。」

私 「おお。」

看護師 「ほら。」

看護師、私の頭の向きを変えてやる

私 「本当だ。」

看護師 「好きだったんです。飛行機。昔から。」

私 「そうなんです。」

看護師 「母が飛行機が好きで。」

私 「ほう。」

看護師 「休みの日にはよく空港に飛行機を見に行つて。」

私 「へえ。」

看護師 「女の人のものに、ちょっと変わっているでしょう。」

私 「いえいえ。」

看護師 「うちには飛行機の写真がたくさん。」

私 「はは。」

看護師 「…死んじゃったんですけどね。」

私 「そうでしたか。」

看護師 「本当は、飛行機に乗る仕事に就きたかったんですけど。」

私 「なるほど。」

看護師 「結びつけちゃうじゃないですか、人って。飛行機、イコール、お母さん。みたいな。」

私 「それで。」

看護師 「結局全然違う道に。」

私 「看護の道ですか。」

看護師 「ええ。」

私 「良かったですね。」

看護師 「え。」

私 「病院には窓があつて。いつでも好きな空を見ることが出来る。」

看護師 「本当ですね。」

私 「運が良ければお母さまとあなたが好きな飛行機を見付けられる。」

看護師 「そうですね。」

私 「ああ、今日はよく喋つた。」

看護師 「すみません、疲れました？」

私 「いいや、あなたと同じでね、飛行機を見ると結びつけてしまう人間が私にもいるんですよ。」



看護師は優しくうなずき、カーテンを閉めようとする

私 「ああ、今日は。」

看護師 「このままにしておきますか。」

私 「そうだね。」

看護師 「西日、まぶしくないですか。」

私 「大丈夫。」

看護師 「お邪魔しました。」

私 「また、いつでも。」

看護師、出ていく

私、はっとして

私 「私としたことが。何を言い出すんだ突然。」

私 「…今日は遅れずに出てきてくれよ。」

私 「桜の下で、待っておくから。」

私、静かに眠りにつく

ゆっくりと場面は桜の下に移り変わる

青年はすでに到着し、酒を飲んでいる

青年 「今日は私のほうが早かった。」

私 「おお、こんなことは初めてだ。」

青年 「いいや、一度だけあったさ。」

私 「え。」

青年 「あの日は俺のほうが早かった。」

私 「いつのことだい。」

青年 「私は高度を下げて、ぐるぐるとお前が来るのを待っていた。」

私 「…高度。」

青年 「こうやって、俺がお前の中に現れた、初めての日だよ。」

私 「初めての…」

青年 「あの日だ。お前は持病が悪化して、入院していた。」

私 「…あの日。」

青年 「まさか、知覧から逆方面に飛ぶほど俺がまぬけじゃない。」

私 「いや、確かに病室が揺れた。」

青年 「だから、俺だ。」

私 「え。」

青年 「お前は夢と現実を混同している。」

私 「あれは…夢だったというのか。」

青年 「夢といえば夢だ。ただ、俺は確かに、あの日お前に別れの挨拶をしにいった。」

私 「よく分からなくなってきた。」

青年 「あまり深く考えるな。何が夢で、何が現実かなんて考えること自体が無駄だ。今、俺は確かにもうこの世にはいない。だけど、こうやってお前と落ち合っている。」

私 「ああ。」

青年 「それでいいじゃないか。」

私 「知覧…。」

青年 「そう。あの日俺は、鹿児島島の知覧から沖縄へと向かった。」

私 「ああ。」

青年 「必中と心に決めて挑んだが、そんなふうまくはいかない。たどり着く前に海へどぼんだ。」

私 「…。」

青年 「ふわりと体が浮いてなあ。不思議と痛みはなかった。気持ちは穏やかで、ああ死んだのだな。とすぐに理解した。」

私 「…。」

青年 「そして俺は、ゆっくり体を起こして、お前に会いに行ったのさ。」

私 「あの時間聞いた音は…。」

青年 「まあ、本物の零戦の音ではないさ。」

私 「感じた揺れは…。」

青年 「現実ではない。」

私 「…。」

青年 「だけど、現実として目に見えるもの、耳に聞こえるものだけが全てだったら、世の中面白くないだろう。」

青年 「いい加減、信じてよ。これはお前の妄想でも、一方的な自問自答でもない。俺との会話だよ。今までも、ずっと。」

青年 「…死人は喋ったら、いけないのかい。」

私 「いや…。」

青年 「行けばわかるさ。」

私 「は。」

青年 「知覧に。」

私 「どうやって。」

青年 「まずは、心を開くところだ。お前は90にもなって、いまだに頭がかたい。昔の話をするのはタブーだと思い込んでいる。もう少し素直になれ。先は短いぞ。」

私 「…。」

青年 「昔話をしたがらないお前の気持ちがわからなくもないが、お前が口を閉ざしたままだと、何も変わらないぞ。」

私 「…。」

青年 「いい加減、そのふたをあけるよ。日本は変わったか。」

私 「変わったが…。」

青年の表情が曇る

青年 「変わったが？」

私 「また、同じようなことを繰り返しているように私は思う。」

青年 「…え。」

私 「平和は、そう長くは続かない。」

青年 「つまり…」

私 「歴史は繰り返す。」

青年 「まさか。」

私 「もしかすると…」

青年 「言うな。」

私 「もしかすると…」

青年 「やめてくれ。」

私 「何も変わっていないのかも知れない。」

青年 「おとおお三」

取り乱す青年。私、はっとして

私 「すまない。」

青年 「無駄死にだったと言うのか。」

私 「違う。」

青年 「この魂は。」

私 「すまない。」

青年 「今でも、この海に沈んでいるというのに。」

私 「落ち着いてくれ。」

青年 「俺は、桜になりたかった…」

私 「…。」

青年 「少し、一人になりたい。」

私 「すまない。」

青年 「いや、いいさ。でも分かったよ。やはりお前は、もう少し口を開くべきだ。」

青年 「語ろうともせずに、『自分だけが止まっている』だなんて、都合が良すぎるよ。」  
青年 「…それに、自問していたのは、お前だけじゃないよ。」

気付けば青年の姿はない。

私は病室で横たわっている

私服の看護師がカーテンを開ける

看護師 「今日も、いいお天気ですね。」

私 「ああ、おはようございます。」

看護師 「おはようございます。」

私 「あれ。今日はお休みですか。」

看護師 「はい。今日は佐伯さんのお見舞いに来ました。」

私 「ああ、これはどうも。」

看護師 「私、今日から少し、お休みを頂くことになりました。」

私 「夏休みですか。」

看護師 「はい。久しぶりに実家に帰ろうかと思って。」

私 「なるほど、いいですね。」

看護師 「いいところなんですよ。空が綺麗で。東京より、空が近い気がします。建物はみんな低いのにね。」

私 「素敵なところでしょうか。」

看護師 「鹿児島です。」

私 「鹿児島。」

看護師 「ええ、行かれたことがありましたか？」

私 「いや…えっと、ち、知覧はご存知ですか。」

看護師 「ああ、特攻隊の。」

私 「ああ…。」

看護師 「どうかなさいました。」

私 「あ、いや…。」

看護師 「鹿児島がどうかしましたか。」

私 「あの、いや、実は…。」

看護師 「私、今日は時間がたくさんあるんです。仕事ではありませんし。」

私 「そうですか…。」

看護師 「はい。」

私、大きく息を吸い込み、小さなため息を一つ

私 「昔、私があなたくらい歳のころ…いや、失礼ですが、おいくつですか。」

看護師 「今年で30になります。」

私 「ならばあなたよりもとうほど若いころ…あの知覧の地から友人が特攻で帰らぬ人となりました。」

看護師 「ああ、その方だったんですね。飛行機と結びつける方っていうのは。」

私 「そうだ…あの、知覧には行ったこととおありですか。」

看護師 「ええ。修学旅行で。」

私 「知覧は、知覧はどんな所ですか。」

看護師 「暖かくって穏やかで、とても良いところですよ。そう、桜がとても綺麗で。山と海がほら、もうすぐそこって感じで。」

私 「飛行場は？訓練場はありますか？」

看護師 「ああ、そこは、今は特攻隊のみなさんの記念館になっています。」

私 「記念館…。」

看護師 「ええ、沢山の、その…遺書や遺品なども展示されています。」

私 「何だっけ？」

看護師 「そう、語り部の方がいて、当時の話を聞くこともできます。」

私 「…。」

看護師 「そうだ、うちの祖母も昔、インタビューを受けたとか言っていたなあ。」

私 「おばあさんは、ずっと九州の？」

看護師 「鹿児島です。」

私 「おお…。」

看護師 「特攻隊の方のお世話をさせていただいたこともあると聞いたことがあります。」

私 「なんということだ…。」

看護師 「なでしこ隊、と言ってたかな。もしかしたら佐伯さんのお友だちとも会っていたかも知れませんか。」

私 「すれ違っていたかもしれない…会話をしていたかも知れない。」

青年の声が聞こえる

青年 「ふたを開けたな。口を開いてくれたな。ありがとう。行けば分かるさ、知覧に。」

私ははっきりと、大きな声をだす

私 「あの、お願いがあります。あなたにここで出会ったのなにかの縁だ。いや、偶然とは思えない。何か大きな力が働いているとしか思えない。どう

か、お願いします。私には後がない。どうか、この夏休みに、知覧へ行ってはくれませんか。」

看護師 「ええ、喜んで。むこうではこちらと違って時間がたくさんあります。」

私 「ありがとうございます。本当に。ありがとうございます。」

看護師 「いいえ、こちらこそ。」

私 「え。」

看護師 「佐伯さんとお話できて、とても嬉しいです。」

私 「…。」

看護師 「私、嫌われてるんじゃないかと思っていましたから。」

私 「とんでもない。」

看護師 「ありがとうございます。では、四日後に帰ってきます。私は知覧で何を見てきましょうか。」

さわやかな音楽が流れる

私は看護師にゆっくりと何かを語っているようだが、声は聞こえない  
私のそばで頷き、メモをとる看護師

傍らに青年の姿も見える

青年は空を仰いでいる

看護師 「それでは。」

私 「では、また。」

看護師、去ろうとする

私 「あの…。」

看護師 「はい。」

私 「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

看護師、去っていく

私 「はあ。」

私 「…私は、長い間、黙りすぎたのかも知れない。」

私 「探そうともせずに、ずっと自問自答の日々だった。」

あたりは暗くなり、私の姿は見えなくなる

男と女が出てくる

詩が聞こえる

メロディがつき歌になっても良い



過去の記憶は臆病だ

なかなか姿を現さない

時代の変化は鋭くて

そのスピードに誰もがのったふり

そのうち記憶は埋もれてしまう

あれこれ理由をつけてみたけれど

思い出す理由が見当たらない

特に悲惨な思い出はさ

思い出したくないものよ

特に生々しいやつはさ

思い出帳には書かないよ

忘れないとか言いながら

実際は思い出したくない

ああでもそれは僕だけなのか

僕の記憶が臆病なのか

ああもしかしたらあの人も

怖くて震えているのかも

やっと開いた時にはもう

手も足も自分じゃ動かない

だけどころして開いた事が

いま生きる力となっている

ここで出会うのも運命よ  
世の中捨てたものじゃない

ああでも僕はもう少して  
捨てて葬るところだったよ

ありがとう、そして

よろしく頼む

あの日聞こえた君の声を

今のあの子に言えたなら

きっと僕は喜んで

最後の日を迎えるだろう

詩が終わると後方で、看護師(女学生でも良い)が青年から手紙を受け取っている場面が見える

一気に場面は明るくなり、看護師が一つの手紙(ノート、メモでも良い)を持ってかけてくる  
病室にはいつものように私が横たわっている

看護師 「佐伯さん」

私 「おお、あなたでしたか。」

看護師 「驚かせてすみません。…あ、お体はどうですか。」

私 「はは。職業病ですな。ええ、身体はいつも通り動きませんよ。」

看護師 「ああ。すみません。」

私 「おかえりなさい。」

看護師 「あの…これ。」

看護師は一枚の紙を手渡そうとする

看護師 「あ…。」

私は手足を動かすことは出来ない

私 「お忘れですか。」

看護師 「ごめんなさい。私、早くこれを見せたくて。」

私 「え…。」

看護師 「多分この方です。」

私 「え。」

看護師 「佐伯さんのお友だちです。」

私 「なんだって…。」

看護師 「お名前が一致しています。」

私 「なんと…。」

看護師 「記念館にあったんです。見えますか？」

私 「この字は…。」

看護師 「間違いありませんか。」

私 「確かに…。」

私 「でも、どうして。」

看護師 「インターネットで調べたら、記念館のホームページに載っていて、私が書き写そうかと思ったのですが、プリントアウトしたほうが、そのままの文字をお見せできるかなと思って…。」

私 「…カタカナばかりで私には分かりませんが、確かに、確かに、これはあいつの文字です。」

看護師 「見えますか。」

私 「はい、はっきりと。」

私 「これは…。」

看護師 「歌です。特攻で亡くなる前に、遺書として歌を詠まれた人は多くいたそうです。」

私 「なるほど…。」

看護師 「見えますか。」

私 「すみません、読み上げてもらえますか。」

看護師 「はい。」

看護師の声に青年の声が重なる

看護師 「咲くときの

花の数には入（い）らねども

散るにはもれぬ

我が身なりけり。」

青年の声がする

青年 「この魂は、今でもあの海に沈んだままだ。」

私 「聞こえますか。」

看護師 「え。」

私 「私には聞こえるんです。」

看護師 「はあ。」

私 「聞こえませんか。彼らの魂が。」

看護師 「魂。」

私 「特攻隊として死んでいった彼らの魂ですよ。」

看護師 「…ごめんなさい。私…。」

私 「ええ。」

看護師 「…聞こえる気がするんです。」

私 「え。」

看護師 「知覧へ行って、子どものところとは違う感想を持って。」

私 「違う感想…。」

看護師 「昔、修学旅行で行ったときは、ただ怖い、悲しい。だけだったけれど。」

私 「ああ。」

看護師 「でもね、悲しいことも現実だから、目をむけたらね、なんだか聞こえてくる気がして。」

私 「ああ、そうだ。」

看護師 「え。」

私 「私は…思い出したくなかったのだ。」

看護師 「え。」

私 「その、インターネット？ホームページ？プリントアウトでは、いつでもあいつの文字が、あいつが最期に残した歌が、閲覧できるのですか。」

看護師 「はい。そうです。検索をかけたらすぐに出てきました。」

私 「知覧まで行かなくとも。」

看護師 「もちろん、知覧の記念館には直筆のものが保存されていますが、画面上ではいつでも、これを見ることができます。」

私 「そして、それを。」

看護師 「ええ、プリントアウトしたものが、こちらです。」

私 「なんということだ…。」

看護師 「仕方ありませんよ。私たち、若い世代でも、知覧に興味を持ち、わざわざインターネットを使って調べようとはしません。」

私 「いや、違う。私は、戦後70年間、ずっと過去を振り返らずに、生きてきたんだ。あいつの亡霊だけを勝手に想像して、最期の言葉を探さずに生きてきたんだ。」

私 「でも、今ならわかる。」

私 「でも、今ならわかる。」

私、突然大きな声を出す

私 「おい…」

看護師

「はい？」

私

「聞こえるか?!」

私

「今、私は胸を張って言う。お前は、犬死なんてしていない！」

私

「お前の魂は、間違いなく、受け継がれている。」

私

「咲くときの

花の数には入（い）らねども

散るにはもれぬ

我が身なりけり。」

私

「私は見てきた、時代の流れの中で。」

声

「1946年、新憲法施行。」

「1950年、朝鮮戦争開戦。朝鮮特需。」

「1964年東京オリンピック。」

「1965年から1970年、いざなぎ景気。」

「1973年、石油危機。日本の経済成長、終了。」

「1986年、バブル景気。」

「1991年、バブル崩壊。…平成不況。」

私

「ああ、お前もきつと、見てきたね。一緒に。」

看護師

「これからの日本が、どうなるのか、私にはわかりません。もしかしたら、時代は大きな岐路にあるのかも知れません。」

私

「…。」

看護師

「だけど、聞こえた気がしたんです。日本が本当に良くなると、残された人が日本を豊かにすると、信じて飛んで行った特攻隊の人たちの声が。だから私は…私は、うまく言えないんですけど…覚悟を持って生きようと思うんです。」

私 「覚悟。」

看護師 「あの特攻隊の皆さんは、佐伯さんのお友達も、みんな20代前半や10代の方々だったでしょう。日本の未来を思って、本気で信じて、日本を信じて、

未来を信じて、飛んで行ったんでしょ。」

私 「ああ。」

看護師 「私は今年で30です。30年も幸せに生きてくることが出来ました。佐伯さんに出会えたのも、何かのご縁だったと思うんです。私がこの国のために

できることがきつとあるはずですよ。だから私は覚悟を持って生きていたいと思うんです。」

私 「ああ。」

看護師 「おこがましいですか。」

私 「いいえ。」

私 「やっとわかりました。」

私 「あいつの気持ちだ。」

私 「何も言わずに、先に行ったあいつの気持ちだ。」

看護師

「咲くときの

花の数には入（い）らねども

散るにはもれぬ

我が身なりけり。」

私 「ほら。聞こえますか。あいつの心意気が。」

私 「ここには、歌がある。」

青年 「ここには、歌がある。」

舞台は終わりにむかう

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。  
著作権はせんすおぶわんだあに帰属します。

\*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens\_of\_wonder